

報告 知的障害者療育における野外活動の意義に関する考察

上原 巖

岐阜大学大学院連合農学研究科（信州大学所属）

Importance of Outdoor Activities in the Treatment of Mental Disabilities

Iwao UEHARA

The United Graduate School of Agricultural Science,
Gifu University (Shinshu University)

(受理日1999年12月21日)

Outdoor activities are important to promote one's health for not only general people, but also for persons with mental or physical disabilities. Especially, for persons with mental disabilities, outdoor activities have treatment values to stimulate their whole body functions and their consciousness from inside to outside. Also, natural environments are not the only kind of restorative environment, but they seem to have substantial advantages over many settings. Therefore, agricultural activities, horticulture, gardening, and forestry, have been sometimes regarded as outdoor treatment activities for mental disabilities.

This study considered the importance of outdoor activities, including horticultural, forestry, and recreational activities, for persons with mental disabilities. Through studying three case studies at American and Japanese treatment institutions that have outdoor programs, outdoor activities were shown to have effects to treat mental disabilities. Physical, emotional, and behavioral changes have been commonly recognized in participants who attended outdoor activities.

These results suggest that outdoor activities are useful treatments for mental disabilities.

Key words: mental disabilities, natural environment, outdoor activities, treatment

1. はじめに

「療育（りょういく：Treatment）」とは、身体および知的、精神発達障害児や病弱児に対する医学的治療や、保育、教育を含む生活活動全体のことを指す（五十嵐他、1984）。療育は、障害児教育の発展と変遷とともに生まれた概念であるが、その障害の種類や軽重、年齢などによって、治療、保育、教育のそれぞれの働きの比重は異なり、知的障害や精神発達障害のように医学的にもその発症原因や治療方法がいまだに確定していない障害については、保育や教育活動を前面に出してその

症状を軽減、あるいは克服していく方法がとられることが一般的で、その障害の内容やレベルによって、療育環境の重要性も高くなるものと考えられている（Carter、1995）。現在の知的障害者の療育活動は室内療育と野外療育の2つに大きく分けられ、野外療育には園芸療法に代表されるような作業活動と、自然散策に代表されるような野外レクリエーションが含まれる。野外における活動の療育的意義については、野外・自然環境の中で活動することによって自ら心身のリハビリテーションを行い、自己治癒力を高め、障害のために内面に向きがちな意識を外部に向けていくことなどがあ

（問い合わせ先）〒399-4598 長野県上伊那郡南箕輪村8304 信州大学農学部造園学研究室

げられている(茂木、1990)。Carter (1995)は、障害者の野外活動には障害の内容やレベルによって様々なアプローチ方法や段階があることを示し、障害者や高齢者の身体的および精神的な健康向上へのツールとしての農林業活動の「癒し」の効果(下村、1998)や、自然環境を利用した福祉施設の活動の可能性なども提言されてきている(中川、1997)。また、国内外には、園芸や森林作業、野外レクリエーションなどの野外療育プログラムを実践している知的障害者療育施設も多い(瀧、1997)。しかしながら、野外療育活動の意義に関する報告は少なく、いまなお事例収集の段階にあるものと思われる(Kaplan, 1993 Chang, 1998)。

これらの点をふまえ、本研究では、野外療育活動を行っている米国、日本国内の3つの知的障害者施設を事例対象として、知的障害者の療育における野外活動の意義を考察することを目的とした。

2. 方法

米国ノースカロライナ大学医学部精神科付属療育施設CLLC (Carolina Living Learning Center: カロライナ生活学習センター)の野外療育プログラム、長野県の自閉症療育施設「白樺の家」での森林作業を中心とした療育活動、同県内の発達障害者福祉臨床施設「親愛の里松川」における野外活動の取り組みの3つの活動を事例対象とした。これらの施設を事例対象として選定した理由は、前者の2施設では農作業を中心とした野外活動が療育活動の中心に置かれていたことと、後者は新設の施設であるため、同様の野外活動の療育効果がスタート時点から把握しやすいと考えたためである。指導員の1人して各施設の療育活動に参加しながら(CLCC: 1997年8月～9月、白樺の家: 1995年5月～1997年8月、親愛の里松川: 1997年10月～1998年5月)、それぞれの施設における野外活動がどのような療育的特徴を持ちながら行われているのかを調査し、それらの結果から知的障害者の野外療育活動の意義についての考察を行った。

3. 結果と考察

(1) ノースカロライナ大学医学部精神科付属療育施設CLLCにおける事例

(1-a) CLLCについて

CLLCは、ノースカロライナ大学医学部精神科付属の自閉症者の療育施設で、1990年に同州ピッツビューローに建設された。自閉症は、脳の機能障害に起因する認知機能障害および対人コミュニケーション障害であり、1000人に約1人の割合で発症し、その約70%は知的障害との複合障害者であるといわれている(日本自閉症者協会、1993)。自閉症の明確な発症原因や治療法はいまだに明らかにされておらず、療育方法についても確立されてはいない(山崎他、1988)。同施設では、1970年代初頭に同大学のエリック・ショブラー博士らによって開発された自閉症の療育体系であるTEACCHプログラム(Treatment and Education of Autistic and related Communication handicapped Children program)に基づいた療育活動が行われ、施設には現在、男性13名、女性2名の計15名の21～40歳の成人の自閉症者が生活をしている他、デイケア希望の利用者も随時受け入れている。療育指導を行う職員は、パートを含む30数名が夜勤を含む3交替制の時間シフトで勤務をし、ほぼマンツーマンの療育指導を行っている。CLLCでは、入所時に個人別に、「運動と音声の模倣」、「視覚と聴覚」、「微細運動」、「粗大運動」、「目と手の協力」、「言語理解」、「言語表出」の7発達機能領域と、「対人感情」、「人とのかかわり」、「物とのかかわり」、「感覚」、「言語」の5つの病理領域を観点としてレベル分けを行い、各自の能力や個性に見合った療育プログラムを作成している(図1)。

(1-b) CLLCの野外活動の特徴

CLLCでは、創設当時から野菜の有機栽培、花壇造成、腐葉土作り、芝刈り、薪集め、地域の自然散策などの野外活動を療育活動の中心に据え、入所者の全員が何らかの野外活動に携わっている。野外活動は週日の午前8時半から午後4時まで毎日行われているが、1日の生活や作業の流れ、内

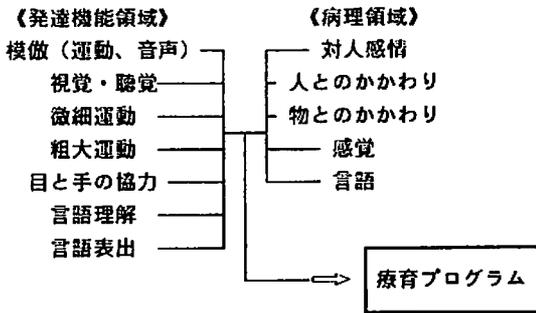


図1 CLLCにおける療養プログラムの編成

容などは、自閉症の持つ認識障害やコミュニケーション障害を考慮し、視覚的に理解しやすいイラストカードを多種類使用して入所者に伝達されている。自閉症者は、作業の位置、量、方向、方法などを理解しにくいケースが多いが（日本自閉症者協会、1993）、実際の各作業、活動においても、クライアントがすみやかに取り組むことができるような標識や指示が積極的に使用され、指導されている（上原、1998）。これらのことからCLLCにおける野外療育は、入所者の療育手段の中心として行われ、また、その活動を通して、自閉症の持つ障害の特性を考慮した療育環境の構造化（佐々木、1992）が行われていることが特徴である。

(1-c) CLLCにおける野外療育活動の効果

CLLCでの野外療育プログラムに取り組むことによって、入所者には自閉性の緩和や認知機能の覚醒などの向上的な変化があらわれてきている（Van Bourgondien他、1993; 上原、1998）。前述した各野外活動は、身支度、道具の準備、活動・作業内容などがそれぞれ体系的に編成されて入所者に示されているため、各入所者はスムーズに活動に取り組むことができ、また、野外活動に取り組むことを1日の生活スケジュールの中心に据え、生活全体のリズムを整えている入所者が多い。

同施設の野外療育プログラムの効果については、細かな機械部品などよりも知覚的に対象が明確な自然物（花、作物、樹木など）を扱い、さらに入

所者に明確な指示や指導を行うことによって意識を外に広げていくことができる、野外での様々な活動を行うことにより、各身体機能をリハビリテーションする効用が得られる、室内作業よりも野外作業においてはパニック、自傷行為などの自閉症特有の障害行動が減少することが認められてきている（Hammock他、1995）、障害によって鬱屈されている内的なエネルギーを身体を動かすことによって発散することができる、野外には開放感があり、対人距離も広くとることができるため、利用者同士のトラブルが減少する、新鮮な空気や風など自然の風致作用を体感することができ、季節感も感じることができる、などが上げられる。

(2) 自閉症者療育施設「白樺の家」における事例

長野県北安曇郡池田町の自閉症者療育施設「白樺の家」では、開所当初より山林における作業活動およびレクリエーションを中心とした野外体験を療育に取り入れた実践を試みている（上原、1998）。

(2-a) 施設概要について

私立の社会福祉法人「信濃の郷」を経営母体とする知的障害者の更生入所施設で、長野県北安曇郡池田町中鶴地区にある。施設は、池田町南部の標高約630mの丘陵地帯の中腹に位置し、周囲は桑畑や果樹園、アカマツ林、ナラ類を中心とした広葉樹林などで囲まれ、林内には散策を楽しむことのできる散策道、林道がある。施設からは、西側に北アルプスを眺望することができ、景観風致的にも好適な条件に立地している。入所者は現在計50名（男性34、女性16名）で、パートを含む24名の指導職員が療育にあたっている。入所者の年齢構成は15歳から60歳までと幅があるが、平均年齢は現在約29歳である。障害の内容比率は、7割が自閉症者であり、3割が知的、精神発達障害者であるが、入所時の障害の状況は、各障害者ともに、言語の獲得困難による概念形成や表象形成が困難であり、自己の意志や状況を相手に伝達したり、相手の意志を受容することが困難であった。したがって、通常の人間関係を形成することが困

難で、社会生活を営む上でのルールを学習することにも支障をきたしていた。また、外見の様子としては、表情が固く、対人関係による変化がない。感情の急激な変化があり、自傷・破壊・興奮等の行動をとることがある。落ち着きのない常動行動が激しい。周囲の状況判断ができず、他者の呼びかけに対しても無反応である等、典型的な自閉症、あるいは自閉傾向知的障害の症状が認められていた。

(2-b) 「白樺の家」の療育理念と療育活動

「白樺の家」では、自閉症の“治療”は、現時点においては事実上不可能であるとし、その認識を療育活動の出発点とすることにした。入所者の過去のそれぞれの生育歴も考慮し、施設の療育理念には、療育を自然環境に委ねる。長期にわたる療育を想定する。

自閉症を“治療”しようとする試みをあえてとらない。強制的な命令等による呼びかけをさし控える。自閉症者の主体的な行動を認め、積極的に称賛、共感を行う。入所者と指導職員との信頼関係を築くこと、の6点を掲げている。「白樺の家」の基本的な療育活動は、山林における作業と森林散策を中心とするレクリエーション活動の大きく2つに分けられる。作業とレクリエーションの比率は、入所者1人1人の障害程度や能力によって異なるが、年間を通して概ね4：1～3：2の割合で行われている。また、前述のCLLCの療育事例と同様に、全入所者が何らかの野外活動・作業に取り組んでいるが、国内の知的障害者更生施設において園芸作業等に從事可能な入所者の割合は平均26%であることを考慮すると（瀧、1997）、この参加率は極めて高いものである。

野外活動は週日に毎日行われるが、その内容は、入所者の適性や興味と毎朝時の健康状態を療育指導職員が判断して決定されている。山林作業は、シタケの原木生産活動や間伐材、薪炭材、竹の搬出作業、駒打ち作業などの作業が中心である。知的障害者の野外活動には明確な段階分けが必要とされることが多いが（グロッセ、1993）、各山林作業は、入所者の個性や興味によってどの作業

にも取り組み易いように、“持つ”、“運ぶ”、“叩く”、“積む”等の幾つもの単純作業に分けられて設定されている。また、年間の活動内容は、春から初夏、秋期から初冬にかけては山林作業が中心

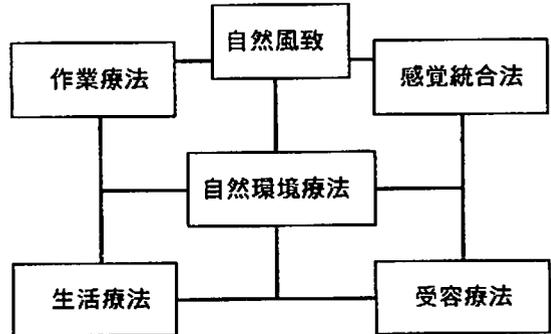


図2 「白樺の家」の野外活動に含まれる療育方法

に行われ、盛夏や冬期間は、池田町周辺のハイキングやスキーなどのレクリエーションが中心に行われている。これらの活動を療育的な見地から分類、統合すると、図2のようになる。

療育の場を自然、森林に置くことは自然環境療法であり、その環境下で作業体験を行うことは身体機能のリハビリテーションを兼ねた作業療法である。また、起伏や傾斜があり、地形が一様でない林内を歩き、形や重さ、感触が1つ1つ異なる原木を運搬することは、身体感覚を統合的にトレーニングする感覚統合法の意義も持っている。入所者は終日を山林で過ごすことが多いが、その際には、樹冠や樹間からの木漏れ日や林内の芳香や風、木々のざわめきや鳥や虫などの音、季節による葉色の変化などの様々な刺激を体感することになるが、それらの風致作用は入所者の感覚機能のみならず、情操感を養うことにも寄与するものと思われる（Uehara他、1999）。雨や雪の天候の際には、外部の環境から自らの身体を保護することを経験的に学び、体得していくことも期待され、それらと同時に食事や排泄、をはじめとする日常生活に必要な技能訓練を行うことは、生活療法であり、これら一連の療育活動における指導員のとる受容的な姿勢は、受容療法の形態である。このように、「白樺の家」における野外活動を中心とした療育

活動には複数の療育的要素が重なり合い、それぞれが相互に関連しあいながら複合的に入所者に作用することを目的としていることが特徴である。

(2-c)「白樺の家」における野外活動の療育効果

山林活動を中心とした野外活動に取り組むことによって生じた入所者の変化を表1に示す。評価は、独断的な評価を避けるためにそれぞれ3名以

表1 野外活動経験後の入所者の変化(入所4年後)
(単位:人)

評価	A	B	C
作業能力	43	7	0
コミュニケーション能力	39	10	1
自閉性の緩和	35	14	1
感情の安定	43	6	1
基本的生活能力	46	3	1

注) 評価は、A(常に向上的変化が認められる)、B(向上的変化が認められる)、C(ほとんど向上的変化は認められない)の3段階で行った。

上の療育指導員の共通認識のもとで行われた。利用者には作業能力や対人コミュニケーション能力の向上、感情の安定、自閉性の緩和、基本的生活能力の向上、の5つの変化が認められてきている。

作業能力の変化の理由としては、利用者各自の自主性や自律的行動が尊重され、指示や命令が控えられた受容的な療育環境、雰囲気のもとで、入所者の森林・自然体験は自由に伸び伸びと行うことができたこと、各自のペースで作業やレクリエーションを行うことによって、それぞれの内的なエネルギーを発散することができ、各活動の成果は周囲の指導員から承認、あるいは称賛されることによって、さらに能動的な姿勢へと転化した、作業への能動性や作業能力の向上は、自閉性の緩和に結びついて、意思伝達能力の向上や障害行動の減少をもたらし、自然環境内で長期間野外活動に取り組むことによって、意識を自己の内的世界より外部の対象に向けられるようになったこと、などが考えられる。また、身体を使った運動経験が乏しかった入所者も、山林内を歩くことを基本と

して、運動能力を向上させることができたことが観察されている。

コミュニケーションの変化では、言語的な向上は認められなくても、自分の意志や感情、喜怒哀楽などを表情やジェスチャーによって示すことができるようになった入所者が多い。入所当初、対人的なコミュニケーションができなかった入所者にも、コミュニケーション能力の向上が認められてきているが、指導員との野外活動・作業という共通の目的と、共感する環境条件のもとでコミュニケーションを図ったことに、その変化の要因があるものと考えられる。

自閉性の緩和では、野外活動後にほとんどの対象者に感情の安定が認められ、山林作業中や森林散策中にパニックを起こす入所者も少なかったことが特徴的である。逆に、野外活動がない時には、施設内において感情が不安定になったり、自閉性の障害行動が増加することが認められていることから、野外活動には、適度な身体エネルギーの発散や、情緒安定の効果をもっていることが推察される。

基本的生活能力の変化では、山林作業や自然環境を中心とした野外活動は、ほとんどの入所者にとってそれまでの生活場面で経験されることのない新しい未知の環境であり、その環境下で連日の活動に取り組むことによって、適度な空腹感や睡眠が得られ、生活のリズムが適性化された入所者が多い。野外活動による怪我もほとんどみられておらず、この理由には、各入所者がそれぞれの感覚機能を使って、活動場所の自然環境を知覚、認識し、その危険箇所を意識したり回避していたことが考えられている。また、天候を考慮しての身支度ができるようになるなど、施設生活の全般を通して、生活トレーニングをしている様子も認められ、野外作業の得られた成就感をきっかけとして、衣服の洗濯や、自分の部屋をはじめとして施設内の掃除、食器洗いなどの仕事にも積極的に取り組むようになった入所者も認められている。

(2-d) 野外活動による自閉症状の変化要因の推察

野外活動による入所者の自閉症状の変化の要因を図3に示す。森林を中心とした自然環境と、山林における単純作業、受容的な療育態勢の3つの要因のそれぞれが絡み合いながら、「白樺の家」の入所者の変容をもたらしたのではないかと推察される。成育段階期における自然・野外体験は、健全な成育のために重要なものであるが、「白樺の家」の療育における森林を中心とした野外体験は、自閉症者に欠落しがちな実体験を補完させる

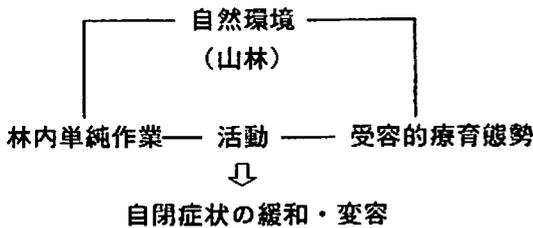


図3 「白樺の家」入所者の自閉症の変化の要因

とともに、身体に備わる本来の五官機能や各能力を覚醒・発達させる効果もあったものと考えられる。また、四季による緩やかな自然の変化も、急激な環境変化に適応することが困難な自閉症者の療育に効果的であったのではないかと推察される。

(3) 発達障害者福祉臨床施設「親愛の里松川」における事例

(3-a) 「親愛の里松川」の概要

「親愛の里松川」は、1997年10月に長野県下伊那郡松川町に開所された知的障害者更生入所施設である。私立の福祉施設であり、施設名は保護者らの運動が基盤となってその開設がなされたことに由来している。現在の入所者数は計30名（男性18、女性12。平均年齢約27歳）であるが、同施設入所以前に他の療育施設に入所していた入所者がその6割程度を占めている。入所者のほとんどが重度知的障害を有しているが、分裂病などの精神疾患や他の精神障害、発達障害（自閉症、ダウン症など）、てんかん、身体障害（脳性マヒ、歩行障害等）などとの重複障害を抱えている入所者もあり、概して日常生活場面における介助要求度は

高い。施設での生活には特に定められた日課やノルマの課された作業等はなく、各入所者がそれぞれのペースで自らの生活を形成していく「福祉臨床」の理念が療育方針に置かれている。療育指導にあたる職員数は現在計15名（パートを含む）であるが、開所してから半年の期間は通常3～4名/日の職員数で、さらに半年経過後からは3～7名の職員数で療育指導を行っている。

(3-b) 開所当初の状況

同施設は、松川町生田地域の標高約780mの山間部にあり、建物付近の土壤の大部分は伊奈川花崗岩の風化したマサ土である。周囲には戦後に植林されたアカマツやヒノキなどの針葉樹林や、ウメ、リンゴなどの果樹園が多い。のどかな山間地域に位置しているものの、施設前には隣村の大鹿村と結ぶ県道が走り、付近の山から採取した土石を運搬する大型ダンプトラックが週日往来し、利用者の単独歩行は危険である。また、施設からは南アルプスを中心とした自然景観が臨めるが、開所当初の建物の周囲には緑化木や芝地、草花などが乏しく、殺風景で、療育環境としては未整備の状態であった。歩行が困難な利用者もいることから、生活の場である建物の周囲にうるおいを与え、利用者が身近に活用でき、安らぐことのできる環境づくりとして、施設周囲の整備が望まれた。

(3-c) 野外活動の計画と実践

野外活動の計画と実践にあたっては、施設周囲の環境整備と、入所者の室内生活への倦怠感や野外への関心の高まりに応じて、また野外活動を通して室内療育ではみられない各人の側面や個性を引き出し、心身の総合的なリハビリテーションを行う療育上の目的で行われた（上原、1998）。活動はいずれも午前中の1～3時間程度、2～4日/週の割合で行われた。レクリエーション活動としては、障害の程度によって1～7kmの距離を歩く施設周囲の散歩や近隣での自然散策を中心として、公園でのアスレチックや、ブランコ、滑り台などの遊具、地元河川での遊びなどを行い、作業活動では、施設周囲の裸地を開墾しての園芸作

業、花壇づくり、緑化苗木の植栽、施設が所有する近郊休閒農地の開墾と植樹、下草刈り作業、地元林家が活動場所としてその一部を開放してくれたアカマツ林における放置間伐丸太の搬出作業、同様のコナラ林におけるシタケ原木の生産作業などを行った。年間を通して野外活動に参加することのできた入所者数は10名前後であった。試みた野外活動は以上のように多岐にわたるが、レクリエーションと作業との比率は約7：3であり、基本的に年間を通じて継続された活動は自然散策であった。野外活動を試行した後、入所者の取り組みの難易度を活動毎に指導職員が評価した結果を表2に示す。入所者の取り組みが困難だったものには、種蒔きや、野菜や花の苗の植栽、畝作り、除草などが上げられたが、それぞれある程度の手先の微細運動を必要としたり、どのように、どの

た個々の入所者の興味や嗜好、集団行動時の特性などを次第に明らかにすることができ、入所者と指導職員とのコミュニケーションの端緒も得ることができた。また、野外活動に長期間取り組んだ入所者には、それぞれ個人差はあるものの、各身体能力のリハビリテーション、コミュニケーション能力の向上、感情の安定化、てんかん発作の減少、パニック等の行動障害発生の減少、不眠による深夜徘徊などの異常行動数の減少、安定した生活リズムの構築、などの向上的変化が認められてきている（Uchara他、1999上原、1999）。野外活動の経験が増すに従い、施設内における自己の役割についての意識も芽生え、他の入所者の衣服の洗濯・乾燥や、食堂の掃除、身体障害を伴う入所者の介助などを自発的にはじめた入所者もみられている。これらの向上的な変化には、上記（2）の「白樺の家」の事例と同様の要因が推察されるが、特に本施設では、以前の入所更生施設では不適応を起こしていた入所者も、本施設入所後に野外活動に取り組むことによって、感情が安定し、異常行動、行動障害も減少し、施設生活に適應する変化が認められたことが特徴である。

表2 野外活動の取り組み難易度

容易～中度	中度～難	困難
散歩	山林探索	畝作り
自然散策	アスレチック	杭作り
野外での食事	川遊び	
球根植え	遊具遊び	
肥料散布	石拾い	
耕運	種蒔き	
灌水	苗の植えつけ	
土運び	除草	
刈草運び	腐葉土集め	
丸太搬出	植樹	
原木運び	山林下刈り	
シタケ菌の駒打ち作業		

くらいの見当で、どの程度まで行ったらいいのか理解できなかったことなどがその理由に考えられる。逆に取り組みやすかった活動には、施設周囲の散歩や自然散策、土や草運びなどの運搬作業などがあげられた。活動内容が視覚的に理解しやすく、始点と終点が明確で、指導員の模倣を行うことによって単純に取り組むことができるものだったことなどがその理由に考えられる。

（3-d）野外活動による療育的效果

まず、療育指導上の見地では、各活動を試みることによって、施設室内では知ることのできなかつ

（4）3施設の野外活動の比較と共通点

以上の3つの療育施設における野外活動を比較してみると、CLLCの野外活動は、TEACCHプログラムという療育体系上に構築された活動であり、「白樺の家」の活動は、療育環境を山林や自然に委ねた自然体験的な療育活動として、「親愛の里松川」の活動は、利用者の特性や療育プログラムを編成していく段階途上における野外活動であると分類することができる。また、それぞれの共通点としては、野外における活動を通して心身の統合的なリハビリテーションを行い、室内環境にはない自然の風致効果を享受しながら、感情を安定させ、パニック等の行動障害の発生数を減少し、安定した生活リズムを構築したことなどが上げられるが、これらの共通点はまた、野外活動の療育意義であると考えられることもできる。

4. 総合考察

以上の調査結果から、野外活動の持つ療育的意義を図4に示す。人間と自然との関わり的重要性については改めて言及するまでもないが、多くの精神発達障害者や自閉症者にとっては、成長過程における野外や自然における体験が、その行動障害の特異性のために欠落していることが多い(総理府、1998)。人間の成長段階における心身の発達のために、特に認知機能の障害を抱えた知的障害者にとって自然環境における野外活動の意義は大きいものと考えられ、同時に、障害者個人の興味や個性を表出していく療育手段の1つとしても野外活動は重要な意義を持っている。また、療育を行う環境としても、自然環境には、温度、光、風、音などにおいて無作為的な身体五官への刺激があり、特定の室内におけるよりも自由空間が広く、時間や季節による変化などの多様性があり、知的障害者に探求心や興味を喚起させることが期待できる(Hollis、1982)。また、野外活動を行うことには、活動を通してのコミュニケーション能力の向上や(Uehara、1999)、感情を安定化し、パニックなどの行動障害を減少する作用があることも報告されている(Hammock他、1995; McGimsey他、1998)。これらのことから、野外活動には身

体的のみならず、精神的な療育効果も期待することができ、それらによって生活能力全体の向上を図る可能性があるものと考えられる。また、これらの療育効果を高めるには、野外活動の指導において、障害者各自の持つ個性や興味、障害特性を考慮した幅の広い野外療育プログラムの編成と、それらに応じた適切な療育環境を設定し、提供していくことが重要であり、実行にあたっては、方法や対象を明確に単純化して提示することが肝要な留意点になるものと考えられる。

5. まとめ

知的、精神発達障害や自閉症には、現在のところまだ有効な治療法は見つかっていない(Kaplan他、1996)。しかしながら、今回の3施設における事例からは、自然の中で身体五官機能をそれぞれ働かせながら作物や草花、苗木、原木、丸太、堆肥、土などの対象を扱うことにより、身体機能を覚醒し、障害を克服していくという野外療育の意義と重要性が導き出された。現在、国内には各地域に障害者施設が設けられ、それぞれの施設に応じた療育活動が展開され、野外療育を実行する施設も多いが、今後は、その地域独自の自然環境の魅力や風致効果などを基盤として、それらをより積極的に利用した野外療育プログラムを再構築していく必要があるものと思われる。

謝辞

本研究の実施にあたっては、日本林業技術協会学術研究奨励金および公益信託富士フィルムグリーン・ファンドの助成を受けた。また、ノースカロライナ大学付属CLLC、白樺の家、親愛の里松川の各職員・関係者、入所者の方々や、信州大学の伊藤精悟先生、馬場多久男先生、佐々木邦博先生には終始ご協力をいただいた。ここに厚く御礼申し上げます。次第である。

引用文献

- Carter, M. J., 1995, Therapeutic recreation, Waveland Press.
Chang, C., 1998, Effects of Landscape on Psychological

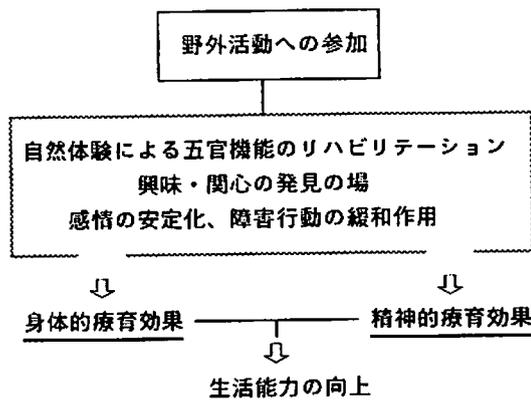


図4 野外活動の療育的意義と効果

- and Physical Responses, *Journal of Therapeutic Horticulture*, Vol. 9, 73-76.
- グロッセ世津子, 1993, 園芸療法, 日本地域社会研究所.
- Hammock, R. G., Schroeder, S. R. and Levine, W. R., 1995, The Effect of Clozapline on Self-Injurious Behavior, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, Vol. 25 No. 6, 611-639.
- Hollis, F. F., 1982, 心身障害児の体育・スポーツ (和訳), ぎょうせい.
- 五十嵐顕他編, 1984, 岩波教育小辞典, 岩波書店.
- Kaplan, H., Sadock, B., 1996, Pocket Handbook of Clinical Psychiatry, Williams & Wilkins.
- Kaplan, R., 1993, The role of nature in the context of the workplace, *Landscape and Urban Planning*, 26, 193-201.
- McGimsey, J. F. and Favell, J. E., 1998, The Effects of Increased Physical Exercise on Disruptive Behavior in Retarded Persons, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, Vol. 18 No. 2, 167-179.
- 茂木俊彦, 1990, 障害児と教育, 岩波書店.
- 中川重年, 1998, 福祉施設における森林総合利用の取り組み 2, 日本環境教育学会第9回大会研究発表要旨集, 81.
- 日本自閉症者協会, 1993, 自閉症の手引き.
- 佐々木政美, 1992, 自閉症のトータルケア, ぶどう社.
- 下村彰男, 1998, 農とレクリエーションの特集にあたって, レジャー・レクリエーション研究, 38, 25.
- 総理府, 1996, 平成10年度版障害者白書, 大蔵省印刷局.
- 瀧邦雄, 1997, 精神薄弱者施設における園芸作業等の現状調査結果・その2, グリーンエージ, 288, 27-33.
- 上原巖, 1996, 療育活動としての森林作業の試み, レジャー・レクリエーション研究, 38, 47-54.
- 上原巖, 1998, TEACCHプログラムによる自閉症者の野外体験療育, 日本環境教育学会第9回大会研究発表要旨集, 39
- 上原巖, 1998, 新設された精神薄弱者更生施設における野外療育活動の試み, 平成10年度日本造園学会関東支部大会研究・報告発表要旨, 1-2.
- Uehara, I., Sasaki, Y., Yamada, C., 1999, Effects of forest recreations in the treatment of mental disabilities, 中部森林研究, 47, 167-170.
- 上原巖, 1999, 地域の自然環境を生かした知的障害者の療育活動, 日本環境教育学会第10回大会研究発表要旨集, 182.
- Van Bourgondien, M. E. and Reichle, N. C., 1993, An example of the TEACCH approach to residential and and vocational training for adults with autism, Division TEACCH of Univ. of North Carolina at Chapel Hill.
- 山崎晃資他, 1988, 自閉症詳説, (財)安田生命社会事業団.